

Living the Lotus 5

Buddhism in Everyday Life

2026
VOL. 248



Rissho Kosei-kai of Chicago

Living the Lotus Vol. 248 (May 2026)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 前田 貴史
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼協祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生かし、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。



自分に何ができるか

庭野 日鑛
立正佼成会会長

つながりあうのが人間なのに

私たち人間一人ひとりの力は、じつに弱くて小さなものです。人間は、言葉や道具が使えて集団行動ができるという優位性がなければ生存競争に勝てず、生き残ることはできなかつたともいわれます。人間が社会的動物といわれるのも、私たちが意思の疎通をはかって協力しあい、みんなが善く生きることをめざす高度な社会を築いてきたからであります。以前、「人と仲よく生きることこそ、私たちが人間として生まれてきた意義」であると申しましたが、生命の歴史から見ても、それは同様であることを、人間は本能的に知っているのだと思います。

ところが昨今は、自分の価値観を大事にする風潮からか、人間の特長ともいえる意思の疎通や人と仲よくしようとする思いにブレーキをかける人もいて、それが自らの孤立を招き、あるいは孤独死などの社会問題に象徴される他者への無関心を生んでいるようにも思います。それは子どもの世界も例外ではないようで、日本での最近の調査によると、この少子化のなか小中高校生の自死者が過去最高に達しているという憂慮すべき状況なのだそうです。

生命誌研究者の中村桂子さんが、十年以上前に「今、いちばんお手伝いしたいのが、子どもたちです。私のところには、小学生が自分の命に悩み、『死にたい』と手紙を送ってくる」(『いきいき』/二〇一五年三月号)と述べているように、当時からずっと、学校での孤立や家族の不和などで心が疲れ、「死にたい」と考える子どもが後を絶たないのです。



日々、自分の生き方を問う

私たちは、自分が困ったり悩んだりしたことであれば、他人の苦悩もすぐに「あの人はたいへんだな」と理解できます。ところが、経験がないと関心すらもてないことが多く、まして死にたいと思うほどの苦しみとなると、ほんとうに当事者の気持ちがわかる人は少ないように思います。

道元禅師は「仏道をなろうというは、自己をなろうなり」と諭されています。自分のことを知っているつもりでも、私たちは自分のことさえよくわかっていないのです。自分のこともわからない私たちに、人の気持ちがわかるかという、私にはとてもむずかしいことに思えます。

では、生きづらさを感じる若い人が多い世の中において、私たちは何もできないのかという、そうではありません。

教育者の森信三先生は「いかに痛苦な人生であろうとも、『生』を与えられたということほど大なる恩恵はこの地上にはない。そしてこの点をハッキリと知らずのが、真の宗教」と指摘され、先の中村桂子さんは、子どもたちに「あなたが今、生きていることは、すごいことなのだ、伝えたい」と切に願われています。いずれも命の真実を伝える大切さを説き、中村さんは「自分を、どこまでもさかのぼれば、みんな繋がって三八億年前の祖先細胞に行き着きます」とも述べて、「自他一体」「みんな一つ」の自覚が、自他を尊ぶ心と生きる勇気を与えることも示されています。

すると、私たちにまず大切なのは、自分自身がどのように苦難を受けとめ、いま命あることの有り難さを自覚していかに生きているかを、生き方をおして示すことなのかもしれません。その結果として悩み苦しむ人の心の声が耳朶にふれたとき、力を与える言葉を届ければいいのです。

「如何なるが苦しきものと問ふならば人をへだつる心と答へよ」——良寛禅師は、人と人が助けあわず仲よくしないことがいちばんの苦しみなのだといえます。ゆえに、自分はいまどうあるべきかを日々三省しつつ、近い人には少しの変化を捉えて「どうしたの」と声をかける。その繰り返しが人を救い、青少年を育てることにもつながるのです。

(『佼成』2026年5月号)



開祖さまに託された使命を胸に 仏さまのご縁に生かされて

ニューヨーク教会シカゴ支部 村上佳代

この体験説法は、2025年3月5日に大聖堂で行なわれた「教団創立88周年記念式典」のなかで、功労者を代表して発表されたものです。

皆さま、お願いいたします。

本日は教団創立88周年、誠におめでとうございます。この佳き日に満面の笑みで私達をお迎え下さるご本仏さまのみ前において、尊い説法のお役を頂き胸がいっぱいです。

私は昨年12月をもって、アメリカ・シカゴの地で35年間務めさせて頂いた支部長のお役を退任させて頂きました。その歩みを振り返ると、仏さまから有難いご縁と学びを溢れるほど頂いてきたことを実感いたします。

私は昭和20年3月20日、東あ京・麻布で城取家五人姉兄の末娘として生んで頂きました。東京大空襲の十日後、何時爆弾が落とされるかわからない不安の最中でした。我が家は日野に疎開し、そして昭和27年、父の信頼する友人の増田さんに導かれ、立正佼成会に入会しました。母は当時、第38支部野村支部長さんの下でご本部に通う毎日でした。幼い頃の私は、学校から帰ると母のいない静かな家で寂しく泣いていました。

その後転居し、母は世田谷教会に移り、この尊いみ教えをお伝えしたいと親戚や商店街の一軒一軒をお導きし、感動したことを家庭で生き生きと話してくれました。私は次第に「母は本当に良い信仰をしている」と感じるようになりました。明るく話し上手な母と無口で仕事熱心な父は夫婦仲が良く、家庭を大切にす両親の下、私は幸せに育ちました。

その後私は佼成学園女子校に通い、中学、高校の六年間、楽しく学校生活を送り、無遅刻無欠席で卒業しました。教会の学生部活動にも誘われ、清掃奉仕などを通してご法の縁に触れていました。

卒業後は良き結婚をと願っていた両親の思いに反し、当時一番上の姉が日系二世と結婚してシカゴに住んでいたこともあり、日頃から憧れていたアメリカへ行くことを心に決めていたのです。アルバイトをしながら英語学校に通い、両親に成人式の振袖の代わりに航空券代を出してほしいとお願いし、海外に持ち込める500ドルだけを持って姉の住む憧れのシカゴに向かいました。



大聖堂で説法をする村上さん

アメリカは若い私にとって魅力的な国でした。華やかで美しいものに溢れ、合理的な生活や英語を話す楽しさに心を奪われました。

そこで姉の夫の友人で、後に私の結婚相手となる日系2世の夫と出会いました。半年後に帰国した私は、彼から何通もの手紙を貰い、次第に心を惹かれていきました。日本まで来て結婚の申し込みを受けましたが、私より十八歳も年上だったこともあり、父は強く反対し、会ってもくれませんでした。反対されれば尚のこと頑なになり、両親の反対を押し切り、アメリカ大使館で結婚の手続きをし、24歳でシカゴに旅立ちました。

ところが、新婚生活が始まったものの「何という親不孝をしてきたのだろう！」と心が痛み、涙する日々が続きました。2年後、1歳になった息子を連れて帰国した際には、あれほど反対していた父が、夫の人柄に触れ安心して孫の誕生を喜んでくれました。その後父は、二度もアメリカに来てくれました。一度はシカゴで開祖さまとのお出合いを頂くことがあり、父の宝物となりました。

私たち夫婦は姉の家の近くに新居を構えました。社会的だった姉は地域の方と交流し、自宅に友人を招いて楽しくお茶を飲みながら悩みを聴くこともあり、そこで佼成会の教えを伝えていたようです。開祖さまが海外渡航の際にアメリカを訪問され、シカゴにお立ち寄りくださった時、姉の話聞き「ここは指導者がいないところなので、『ほほえみ会』という名前で、仲良く集うと良いですね」とのお言葉を下さったそうです。

その会はずいぶん部屋がいっぱいになるほど人が集まり、その中の一人で姉がお導きした松本さんが初代支部長となり、シカゴ支部が発足しました。

その後ニューヨーク教会シカゴ支部として歩み始め、私は1990年に支部長のお役を拝命し、開祖さまから直々にお役の心構えを頂く機会を賜りました。ニューヨークで開かれた「子どものための世界サミット」にご参加された開祖さまがご帰国されるにあたり、空港までお見送りさせて頂いた時のことです。開祖さまは、姉が法の種をまいたシカゴに、妹が支部長のお役を拝命すると聞かれると大変喜ばれ、私の名前を鑑定して下さいました。「貴女なら、今に支部がいっぱいになるほど人が集まる」「言われたら『はい』と言って実行すると良い」とおっしゃる開祖さまのお言葉に、「え！私の何処にそんなパワーがあるの？」と嬉しくなり、只々舞い上がってしまいました。同時に、勇気を与えて下さったお言葉にお役の責任の重さを『ずしっ』と感じていました。

当時、私は航空会社で接客の仕事をしていました。私は「支部長らしく生きたい」「仏さまに恥じない自分でありたい」と思い、生き甲斐を持って日々を過ごしていました。どんなに疲れていても朝夕のご供養を欠かしたことはなく、疲れのあまりご供養中に居眠りして、ろうそくで髪を焦がしてしまったことも一度や二度ではありませんでした。

その頃、ミネソタ州、ミシガン州にも信者さんの輪が広がっていて、キャラバンと名付けて教会長さんと一緒に空港から車で10時間をかけ布教したこともありました。壮大な国土のアメリカならではの布教の現実です。

当時のシカゴ支部では、自分達の道場をお手配頂



1990年、開祖さまから支部長のお役の心構えを頂く村上さん

きたいと一生懸命お導き修行に取り組みました。そして5年の歳月をかけ、郊外のマウントプロスペクトに念願の道場をお手配頂きました。2001年、会長先生にご来道頂き、入仏落慶の運びとなり、ご本尊像が勧請されたのです。会員一同、これに勝る喜びはありませんでした。有難くて有難くて、私は「今世、私をご本尊さま、そしてみ教えを守らせて頂くのだ」と強く心に思いました。

シカゴ支部はニューヨーク教会から飛行機で2時間ほど離れています。教会長さんは1～2か月に一度泊まり込みで布教に来て下さり、私達はそのたびに元気を頂きました。私は頻りに報告や相談をし、会員さんと教会長さんを繋ぐメッセンジャーの役割に徹してきました。

一方、支部長としての悩みや葛藤も尽きることはありませんでした。特に毎週日曜日に行われる英語法座の参加者には、それぞれ専門分野の知識人が多く、仏教を知的に学ぼうと入会してくる人が少なくありません。日本とは異なる文化の中での法座は、互いの専門知識をもって問題解決のための方法論やアドバイスが活発に飛び交うのです。私はいつも「方法論だけで人は救われない」という思いに駆られ、このままで良いのかという問題意識を抱えていました。

そうは言っても、私も法座主として結果を出すことを優先し、即答してしまう自分でした。私は、相手の心を理解したいと法座主教育を学びながらも、現実には思うようにいきません。葛藤が続きます。

ある日の法座で、教会長さんが意見を出される方に対して「あなたはどんなお気持ちだったのですか？」と問いかけました。するとその方は自分の気持ちを語り始めたのです。教会長さんはただ黙ってその方の話に傾きながら、じっと耳を傾けていました。参加者全員がその方の話に聞き入りました。私もその輪の中の一人

Interview

でした。

この体験を通して、「人は自分の気持ちを語る中から自らの心に気づいていくのだ」と感じるようになっていきました。無我夢中で走り続けていた私が立ち止まり、人の思いに耳を傾け対話し、心を聞くことの大切さに少しずつ気づいていったのです。今まで人の気持ちを聴こうとする心のゆとりがなく、自分の思いを通したいと苦しんでいた未熟な自分に変化が起きていきました。

時が流れ2020年、コロナ禍で支部は閉鎖されましたが、インターネットを通じてニューヨーク教会と繋がり、他州に住む会員さんとも共に学ぶ時代が訪れました。「想像もしていなかった時代が来た。」と思い、私はこの大きな変化こそ、仏さまのおはからいと感じずにはられませんでした。

シカゴ支部は一人ひとりが個性や特性に溢れ、まるで千手観音さまのようにそれぞれの持ち味を生かし、素晴らしい布教が展開できる支部だと今は心から信じています。私は僧伽のお一人おひとりに支えられ、お役を務めることができたのだと感謝の心で一杯でございます。そんなシカゴの僧伽は私の誇りです。

振り返ってみますと、シカゴに永住することになったのは18歳年上の夫との出会いがきっかけでした。夫と交わした約束である「家庭を大切にすること」を心に留め、私は長い年月、家庭と仕事、そしてお役に励んできました。

私は口やかましい母親でしたが、大らかで優しく家族思いの夫に見守られ、成長した息子は警察官となり、退職後の今は警察官に柔術を指導する立場にあります。娘は小学校の教員となりました。いつも困っている友達、苦しんでいる人がいると放ってはおけず、手を



サンデーサービスで法座主をする村上さん(写真奥の御宝前の前)

差し伸べる温かな心を持った子ども達に成長しました。そして、一生懸命お役に励む私を夫はいつも静かに支えてくれました。

その夫は直腸癌を発症し、2002年3月30日、75才で旅立ちました。自宅でホスピスケアを受け、子ども達と共に看病した2か月間、夫が痛みも苦しみもなく、家族に囲まれ、穏やかな時間を過ごしてくれたことは、夫への深い感謝と共に今も私の心の支えとなっています。

現在は娘家族が私と同居してくれています。今では、我が家に子ども達が集まると必ずお父さんを懐かしく思い出し、夫の話題で語り合う私たち家族です。今まで頂いた数々のご縁、様々に味わった葛藤や喜び、そのすべてが仏さまから頂いたかけがえのない私の宝物となりました。

これからは、支部の一員としては勿論のこと、日系人サービスセンターでのボランティアを継続し、地域社会のお役に立てるよう精進させていただきます。

皆さま、有難うございました。



2025年11月、支部長退任式の日シカゴ支部のみなさんと(前列左から3番目が村上さん)



日常生活における十如是：

先月に引き続き、立正佼成会の国際アドバイザー、ドミニク・スカランジェロ 博士による「即是道場(Practicing the Dharma in the Here and Now)」を掲載します。即是道場は法華經の「如来神力品第二十一」に示される「道場觀」——あらゆる場所が修行の場になり得るという教え——に由来しています。即是道場は、家庭や職場、学校など、日常生活のどのような場所でも教えが実践できるよう、私たちの背中をそっと押してくれる教えです。



ドミニク・スカランジェロ博士

今月は「如是果」、「如是報」、「本末究竟等」について考察します。十如是の探求は今回で完結です。立正佼成会の庭野開祖は次のように説明しています。

「果」は、いうまでもなく「結果」です。「因」がある「縁」を得て、ある作用を実現したものです。(『法華經の新しい解釈』204項)

「如是果」とは行動によって生み出された直接的な結果を指します。このことを分かりやすい例で説明しましょう。

パソコンで作業している最中に、うっかりキーボードの上にコーヒーをこぼしてしまったとします。コーヒーはキーボードの中に浸み込み、パソコンの基盤を壊してしまいます。

私の不注意さ(如是性)がこの事故の可能性(如是力)を生み出し、それがパソコンの横に置かれたコーヒーカップという条件(如是縁)と出合いました。私の不注意な手の動き(如是因)は、条件が違っていれば何の問題も引き起こさなかったかもしれません。しかし、コーヒーカップが置かれていたために、その同じ動きが、パソコンが壊れるという結果をもたらしたのです。

それがこの例の「如是果」です。では、「如是報」は何を指すのでしょうか？庭野開祖は次のように説明されています。

結果というものは、ただそれが実現したというだけにとどまらず、かならずあとへ何物かをのこす影響があります。(『法華經の新しい解釈』204項)

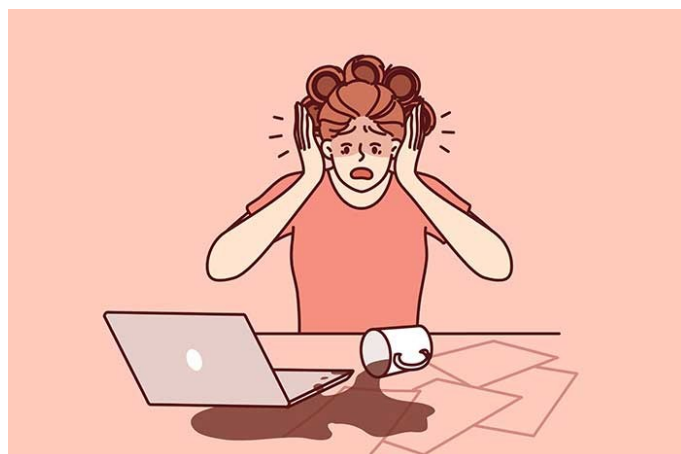
パソコンの上にコーヒーをこぼしてしまった場合、長期的な影響が出てしまうのは明らかです。パソコンの修理や買い替えの必要性、そのための経済的な負担、またパソコンを使えない不便などがそれにあたります。これらの継続的な影響が「如是報」です。

これは日常の小さな例に過ぎませんが、ここから「因」と「縁」の出合いが「果」と「報」をもたらす一連の流れが明確に見えてきます。ここで、私たちの幸福にとってよ

り重要なのは、この流れを人間関係の中でどうとらえるかという点です。

前回でもふれましたが、電車やバスの中で、少年がお年寄りに席を譲る場面を考えてみましょう。一連の流れの発端として、少年の心には、親切な行ないをしたことによる満足感が生まれるのではないのでしょうか。次に、その経験をとおして、少年はもっと人の役に立ちたいという気持ちになるかもしれません。そして、そのことが少年の中に菩薩の慈悲の心を育み、やがて少年を思いやりのある大人へと成長させていくのです。そのような内面の変化もまた、「如是報」なのです。しかし、ここでひとつ重要なことに気づかされます。それは何かといえば、内面の「心」の変化が「如是報」であるということは、良い行ないをすることによって「如是性」もまた変化するということです。

いふならば、十如是は円環型の回路のようなものです。つまり「如是報」は再び私たちの「如是相」や「如是性」にフィードバックされ、さらにそれは「如是力」やその先の変化へとつながっていくのです。私たちの行動の結果が人格を形成し、その人格がさらに将来の行動に影響を与えていきます。十如是の原理に沿って生きるとは、このような自己向上のサイクルを認識し、それ



を上手に扱うことを意味します。つまり、自らの思考や行動を仏さまの教えに調和させることによって人格が向上し、その結果、より幸せで充実した人生を送れるようになる——そうした良い循環を作り出すことができるのです。それが十如是の法則に従って生きるということです。

しかしうまく行動できずに苦を招いてしまったとしても、そこで終わりではありません。長期的な影響としての「如是報」はマイナスであり続ける必要はないのです。私たちがどのように結果と影響を解釈し、反応するかでマイナスをプラスに変えることができます。私たちが自分の間違いに気づき、反省して改めれば(懺悔)、稚拙な行動が招いた結果や影響でさえも価値ある学びとなり、成長と悟りの機会となり、苦の経験が慈悲と智慧の種になるのです。

庭野開祖が私たちに「出合うことすべてを幸せの因と見ること」の大切さを教えてくれた理由はここに 있습니다(『開祖さまに倣いて』34項)。「因」が善い「報」につながるかどうかは私たち自身の心に大きくかかっています。喜びの経験であっても、つらい経験であっても、すべての経験を内省と自己修養の材料として受け止めれば、あらゆるものが私たちの成長の糧となるのです。私

たちは過去の事実を変えることはできませんが、その意味と影響、つまり「如是報」を変えることはできます。

十如是のそれぞれの如是は独立したものではありません。十如是はあらゆる経験や現象の諸側面を総合的に表わしたものであり、それぞれの如是の間の関係性はセーターの編み目に似ています。編み目のひとつを引っ張れば、周りの編み目もつられて動きます。それと同じように、人に対する態度や表情、声のトーンや返事の仕方など、どれかひとつが変わるだけで、人間関係全体が変わります。ですから、これまでの出会いを振り返り、自分自身を正せば、私たちはたとえ何年も経った後でも、すべての経験は悟りのためにあったのだという確信を得ることができるのです。

このような十如是における、初め(本)から終わり(末)までの関係性を、「如是本末究竟等」といいます(『法華経の新しい解釈』202項)。そこでは、一つひとつの側面が全体の動きに影響を与える関係にあります。私たちにとって、このことを念頭に置いて日常生活でご法を実践することは、意識して目の前の結果と長期的な影響の両方を変えていくことにつながります。その結果、私たちの人生は救われや悟りに向かって少しずつ変化していくのです。





サンガの現場レポート

サンフランシスコ教会教会長 李 史好

サンフランシスコ教会に赴任した2023年、私は教会が発行している月刊のニュースレターに初めて寄稿し、開祖さまがやさしく説かれた法華経の縁起観を教会の皆さんにお伝えする機会をいただきました。

その中で私は、光祥さまのご著書『開祖さまに倣いて』の34ページに紹介されている、「常にまわりの人をよい因・よい縁と見る」という開祖さまの「善因善果」の教えに触れ、続いてその教えに対する私の領解を、次のようにお伝えしました。

人生の中で思い通りに物事が進まない出来事が起きると、私たちはつい、何か悪い原因があったのではないかと思いがちです。しかし実際は、すべての結果はそのときの自分にふさわしい現象であり、その結果に対して良し悪しを判断するのではなく、どのような結果であっても謙虚に受け止めることによって、その出来事自体が善因(よい因)となり、やがて善果の種へと変わっていきます。ですから、この世の中に悪因悪果は存在せず、すべての流れは善因善果なのです。

私はサンフランシスコ教会に赴任した際のご挨拶の中でも、このことを会員の皆さんにお話しさせていただきました。

この度、国際伝道部から寄稿のご依頼をいただき、赴任から3年を経た今、自分自身を振り返るチャンスを頂戴したような気がいたしました。赴任当時の自らの心を振り返り、「私は開祖さまの『善因善果』の教えを、会員の皆さんへのメッセージとしてお伝えしたものの、実は私自身の日ごろの生活の中で、すべての物事の結果を素直な心で、自分を成長させる『因』として受け止められるかどうか自問するための、私自身にぴったり当てはまる大切なメッセージだったのだ」と深く気づかせていただきました。

サンフランシスコ教会の会員さんで、ご家族との関係で悩んでおられる方がおりました。何度もお話を聞かせていただく中で、彼女がどんなに正しいことを伝えようとしても、ご家族が受け止めてくれないことが大きな悩みであることがわかりました。私は、彼女が自分の気持ちを伝えることだけに一生懸命になっているように感じたため、もっと相手の気持ちに寄り添うようお伝えしました。しかし、彼女は私の助言を受け止めることができず、その後も正しいと思うことを主張するだけで話し合いは進展しませんでした。私としては、自分の助言を聞いていただけないことをもどかしく思いました。

しかし、ふと因果説に思いを馳せた時、実は私も彼女と同じではないかと気づいたのです。そのときから私は、彼女に話を聞いてもらえないのは私にとって困った出来事ではなく、相手の立場に立つことを教えてくれている善い因なのだと受け止められるようになりました。自分の想いを伝えようとする一心で、彼女の立場に立っていなかったことに気づいたのです。「私も彼女の立場だったら、きっとこの助言を素直に受け止めるのは難しかったらうな」と思い、その気持ちを正直に彼女に伝えたところ、彼女の心が少し和らいだように感じました。このやり取りを通して、私自身が、相手の立場に立てずに自分の気持ちを優先していたことに気づくことができました。

現在も、伝えたいことが相手に伝わらず、悩むことが少なくありません。しかし、「物事を伝える立場にある私自身が成長した分だけ、相手に伝わっていく」ことを肝に銘じ、これからも支えてくださる多くの会員さんへの感謝を忘れず、ご法のままに精進してまいりたいと思います。



仏さまの衣を着る

「忍辱」は相手を思いやること

立正佼成会開祖 庭野日敬



「柔和忍辱の心」ということで、「柔和」の次に「忍辱」ということが説かれています。これは、ふつうの言葉でいえば「忍耐」です。日常生活上のストレスや、人間関係における反抗、侮辱、迫害などを耐え忍ぶことです。つまり、忍耐力がないと、柔和な心にもなれないのです。

近ごろは、この忍耐する心が軽んじられるのか、忍耐強さがなくなったように思えて、心配になります。ちょっとしたことで激怒して、われを忘れて人を刃物で刺したり、バットで殴り殺したりします。明治生まれの私などには考えられないような、暴力事件が続出しています。

これはいつもいつていることですが、いまの豊かさのなかで、私たちは少々自分勝手な価値判断に走り、相手を思いやる心の余裕を失っているようです。私たちはだれしも、何かのはずみでカッとなったりします。カッとなりそうなきでも、その怒りを抑えるたびに心に余裕ができて、人間が大きくなっていくものです。

私ごとで恐縮ですが、海軍にいるとき新兵の教育係を命じられたことがあります(昭和四年ごろ)。当時の海軍では、新兵教育には体罰が必要とされ、横ビンタを張るのは日常茶飯事で、精神棒と称する棍棒で気絶するほど殴りつけることもありました。しかし私は、新兵たちに「おまえたちを絶対に殴らない」と約束したのです。これは、自分自身への誓いでもあったのです。教育係の私は、まず自分の行ないを大切に、何でも話し合いの場をもちました。

上官たちは、そんな私を生意気だと睨んでいたようです。あるとき、一人の新兵の動作がちょっと緩慢だったのを見た甲板士官が、「庭野！おまえが横ビンタを張らないから、こんなやつが出るんだ！」といって、大勢の前で私を張り飛ばしました。私はそれでも方針を変えることなく、非暴力に徹しました。自分が殴られても新兵をかばう、そんな姿を見て、新兵たちの行動も一変したのです。

庭野日敬平成法話集1『菩提の萌を發さしむ』p.98-99



他のために生きるしあわせ

国際伝道部長
前田 貴史

皆さん、こんにちは。3月から4月にかけて、出張でイギリス、ブラジル、アメリカ、台湾を巡り、世界のサンガと出会う機会をいただきました。初めてお会いする方ばかりであるにもかかわらず、どこか旧知の仲のような温かさを感じました。その理由を考えてみると、私たちがお互いを理解しようと努めているからであることに気づかされます。言葉や文化の違いを超えて、「わかり合いたい」という心が、自然に人と人とを結びつけているのだと思います。

人間は本来、つながりあって生きる存在です。しかし現代は、自分の価値観を大切にするあまり、他者との関わりを避け、孤立を深めてしまう傾向が見られます。そうした中で、「幸せとは何か」を考える手がかりとして、心理学者エリザベス・W・ダンらの研究があります。与えられたお金を自分のために使うか、他人のために使うかで幸福感を比べたところ、他人のために使った人のほうが、より深い幸せを感じていたことがわかったそうです。

私たちは「得ること」に幸せを求めがちですが、実は「与えること」、すなわち人を思う心の中にこそ、本当の幸せがあるのではないのでしょうか。本仏の慈悲の教えが示すように、小さな思いやりや一言の声かけが、相手の心をあたためると同時に、自分の心をも豊かにしてくれます。「この人のために」という一念がつながりを生み、他者だけでなく自分自身をも救い、私たちを真の幸福へと導いてくれるのではないのでしょうか。



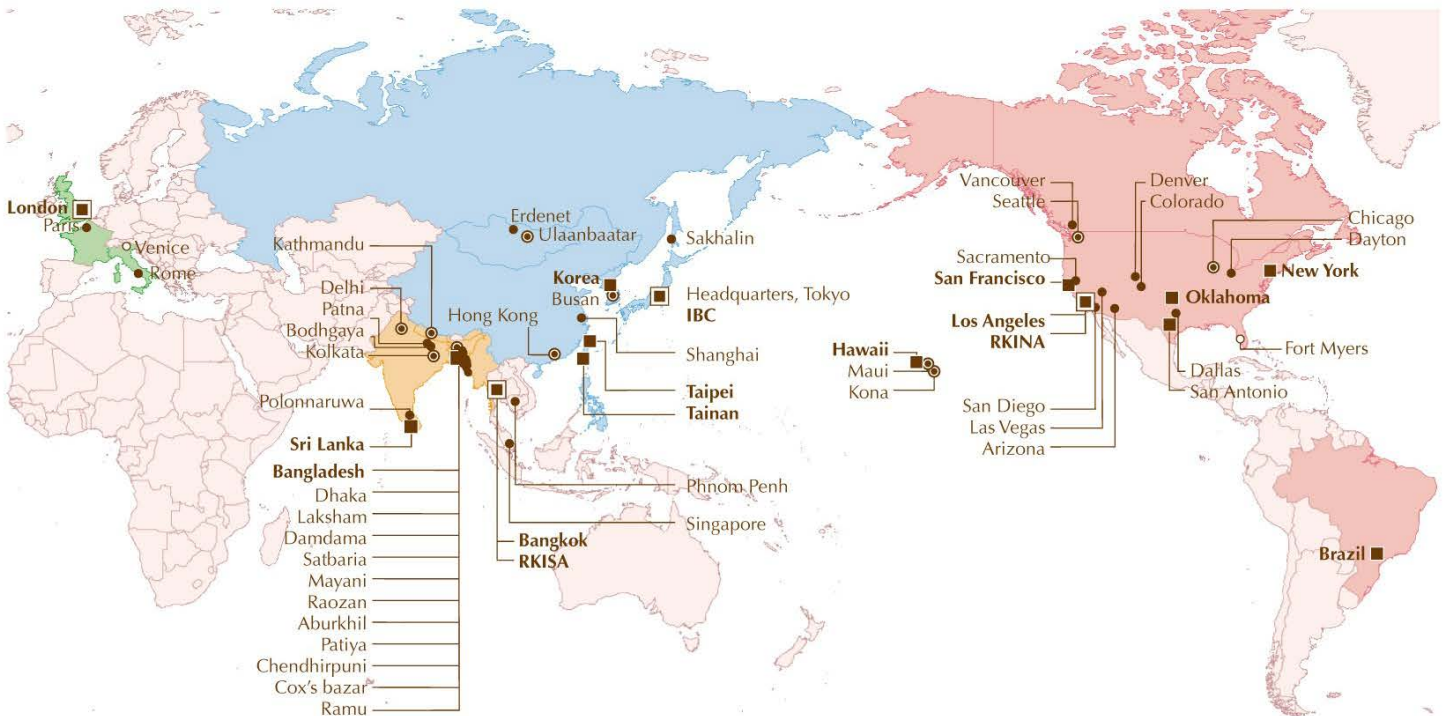
4月1日に台南教会(上)を、翌2日に台北教会(下)を訪問し、法座席で会員の皆さんと

Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about local Dharma centers



facebook



X



✉ We welcome comments on our newsletter Living the Lotus: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp